

(続紙 1)

| | | | |
|--|----------------------------------|----|-------|
| 京都大学 | 博士 (地域研究) | 氏名 | 高道 由子 |
| 論文題目 | 感情経験と布の価値 —東ネパールにおけるダカ織りの民族誌— | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>本研究はネパールにおけるダカ織りについての民族誌的研究である。ダカと呼ばれる複雑な幾何学模様織り込まれた東ネパールの手織物は、大変手間のかかる技法で織られ、多大な時間を要する。ダカを織ることは、ドゥカコカーム(苦勞のともなう仕事)と言われ、織るときの苦勞の経験は、必ずしも織り手や生産に関わる人々だけでなく、ダカに関わる人々の間で、異なるレベルで共有されている。このように多様な人々の間で常にずれやねじれを帯びながらも共有される、つくる人の苦勞の経験は、モノとしてのダカの価値に大きく関係しているように見える。本研究では、東ネパールのダカを対象として、モノをつくる経験が、モノの価値をめぐる人々の葛藤や討議・交渉といかに関わっているかについて、文化人類学におけるモノの価値や真正性、市場に関する議論を参照しながら検討する。</p> <p>本研究では、次の3つの問いについて検討する。まず、ダカを織る行為における織り手の苦勞の経験とはいかなるものであるか、次に、それがどのように多様な人々に共有されているのか、最後に、その共有された経験は市場において、どのように討議・交渉されるのかである。その問いに答えるため、本研究は学習理論における実践コミュニティ理論を分析枠組みとして用いる。これにより、生産者と消費者、買い手と売り手、織元と織子といった役割の区分や、工房、開発団体、民族といった制度的なコミュニティの内と外といった区分を取り払い、ダカの実践コミュニティの同心円に参加した多様な人々と、円の中心にいる織り手との間の距離や関係性が、経験の共有やモノのやりとりと、いかに結びついているか捉えることを目指す。</p> <p>第1章では、ダカというモノそれ自体およびダカの帯びる複数のイメージがいかに形成されてきたかについて、18世紀後半の東ネパールのネパール王国への統合、外国からの開発援助、1990年のネパールの民主化とともに興隆した民族運動およびネパール国民文化創出の動きといった社会経済政治状況と関連づけながら検討する。それにより、開発の文脈や国家の象徴、民族の伝統といった、それぞれ一元的な角度からダカについて捉えてきた先行研究を批判し、視座を広げる。</p> <p>第2章では、調査地域であるM町の概要と同地におけるダカの地域的展開について、1980年代にイギリス政府とネパール政府の協力のもと実施された開発援助プログラム(KHARDEP)との関わりから検討する。ネパールの手工芸研究のほとんどが、開発援助やフェアトレードにおける狭い枠組みにおける生産者のエンパワーメントの成否を問うているのに対し、本研究では地域のものづくりが開発援助を契機にいかに変容した</p> | | | |

のか、プロジェクト終了後も含めた長期的視野の下でのものづくりの変化の過程を含めて捉える。

第3章では、KHARDEP終了後も、KHARDEPが想定していた形とは別の形で生産が継続する、M町におけるダカの生産実践に焦点をあて、人々の日常世界の中でダカがいかにかに生産されているのかについて検討し、制度的視点が等閑視してきた生産に実際に携わる人々の視点から、その様相を捉える。

第4章では、筆者自身が工房でダカを織りはじめた経験による、ダカに対する見え方や工房における関係性の変化を踏まえながら、工房の人々がダカを織る苦労の経験をどのように共有しているのかについて、人々の語りや工房で起こる小さな事件の事例を通じて描く。本章の事例を通じて、ダカを織る苦労の経験とは、織ることそれ自体による身体的経験にとどまらず、そこに生きる人々の全人格的な経験であることを示す。さらに「わざ」の習得や生産実践コミュニティへの参加を通じて、たとえそこに共同作業や楽しい会話が繰り広げられなくとも、人々は他者のかなしみや辛さといった生きる経験を共有している可能性を指摘する。

第5章では、ダカを織る行為や経験が、価値として討議・交渉される場としての市場におけるやりとりを取りあげる。東ネパール地域は外国への出稼ぎやグルカ兵としての英国軍への参加などから、早くから貨幣経済が浸透した地域である。しかし貨幣経済が浸透しているからといって、そこでは匿名的で均質的な取引が行われているわけではない。本章では、M町のバザールにおける具体的なやりとりの中で、他者のまなざしをいかに操作するかに主眼をおいてきた真正性の議論に対して、前章までで見てきたダカを織る苦労という真正な経験を共有しながら行われる討議・交渉のあり方を提示する。

終章では、M町のダカの事例では、モノをつくる行為におけるつくり手の経験が、人々の間で多様な形で共有され、市場においても、モノの価値として討議・交渉に大きく関わっていることを結論として述べる。そして、モノをつくる苦労の経験をモノの価値として重要視する本研究の事例と、モノの価値が市場における匿名の取引で決定される社会との間に連続性がないわけではなく、実践コミュニティ理論において参加者の位置が常に変化しその境界も制度との関わりの中で常に揺れ動くように、モノをつくる人々の苦労の経験を知らうとし、想像することを通して、一見、異なる価値体系にいると思われる人々の間にも、モノの価値の共通の基盤がつくられていく可能性が常に開かれていることを指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

ネパールで生産されるダカ織りは、ネパールの国民的衣装の一部であるトピと呼ばれる帽子の布として広く使われている。また1980年代の開発介入においては、ダカのフェアトレード製品としての生産を通じた女性のエンパワーメントが目指された。また1990年代以降興隆してきた民族運動のなかで、ダカは東ネパールのリンブー族に固有の伝統であるという主張がなされ、ダカは民族アイデンティティの象徴という役割も担われてきた。このようにダカ織りは、ネパールにおけるものづくりや、より広い社会経済変動を考察するための、重要な鍵となる研究対象である。本論文は東ネパールにおけるダカ織りの現場への参与観察を通して、それがどのような経験を通じて生産され、またその価値をめぐって、どのような討議・交渉が行われているのかを探究するものである。

本論文の学術的な意義は、以下の3点である。

その第1はダカの生産現場における参与観察を通して、ものづくりについての優れた民族誌的記述を行なっている点である。著者は学習理論における実践コミュニティの理論を援用しながら、工房において他の織り手と隣りあわせてダカを織ることによって、ダカを織る経験についての共通理解へと次第に導かれている過程を描く。ダカ織りは重労働であり、身体的な苦痛をともなう。他のものづくり研究では苦痛をともなう労働が、共同作業や会話を通して楽しさに転換される過程が描かれてきたが、ダカ織りの工房では会話はほとんど行われず、作業時以外の会話においても、痛みの側面が強調される。そのような「痛み」や「苦労」についての言及は、織る作業のみでなく生活全般に関する苦労や痛みの経験についての語りとは切れ目なく接続していく。本論文は、ダカの生産や販売に関わる人たちの日常生活やライフヒストリーを描くことを通して、ダカ織りの実践を、重層的で生き生きとした民族誌的記述のなかに位置づけることに成功している。

本論文の第2の学術的意義として、開発の人類学への貢献が挙げられる。ネパールの開発研究においては、開発介入が当初の計画通りの成果を挙げたか、挙げなかったかが問われることが多い。1980年代のダカ織りのフェアトレードを通じた女性のエンパワーメントを目指す開発援助プロジェクトにおいては、社会的に弱い立場にある女性をダカ織り従事させ、外国人の「倫理的消費」を通じた、女性たちの経済的・社会的向上が図られた。このプロジェクトを通して、外国人向けの流通経路が開拓され、新たな生産方法（工房における生産や、新たなデザインや色系の使用など）が導入された。しかし開発プロジェクトの終了後、ダカ産業従事者たちは、プロジェクトによって導入された変化の一部を継続しつつ、国内市場と、国外在住のネパール人向けの生産と販売へとその重点を移し、ダカ産業はさらなる発展を遂げている。このように、本研究は開発の主体によって予期されていなかったようなさまざまな展開を描いている。また工房に織り手

として身を寄せることが、収入の向上だけにはとどまらない生活の安全網ももたらしていることを質的な記述を通して明らかにしている。本論文はこのように、開発プロジェクトによる介入と、より広い、あるいはより微細な社会経済的過程を関連づけながら把握するための視座を提示するものである。

第3は、ネパール・ヒマーラヤ研究への貢献である。東ネパールに関しては1970年にリンブーを含む非ヒンドゥー民族と、ネパールの支配階層に属する高カースト・ヒンドゥーの関係の変容を、土地所有制度の変化を軸に議論した主要な研究が行われており、その後もネパール国家と非ヒンドゥー民族の対抗的關係を巡る研究がその中心を占めてきた。民族やカーストの枠組みを超えた協働や共生のあり方を捉えた研究や、国境を超えたネットワークの動態についての研究はまだ少ない。「リンブーの伝統」と言われながらも、さまざまな民族・カーストの人々に関わるダカ生産の現場を詳細に描き、また国境を超えてダカ製品やその原材料の流通する様態を捉える本論文は、ネパール・ヒマーラヤ研究の新たな展開に貢献するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年2月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。